ともしび
1995.3
第17号
大学婦人協会東京支部

●1995年 IFUW 国際会議日本大会に向けて
●激震の神戸支部へお見舞

『一九九五年 IFUW国際会議 日本大会に向けて』

日本準備委員会
委員長　房野　桂

IFUW国際会議も、あと半年後に迫り、慌ただしい毎日でございますが、東京支部の皆様方には、会議書類を入れる袋をご寄付いただいたり、大勢の方々に、LACの各委員会でご活躍いただいたりで、いつもありがたいことと感謝いたしております。

『女性の未来は世界の未来—生存と進歩のための教育』をテーマに開かれます今度のIFUW日本大会は、開会式、本会議、全体会議と並んで、専門者会議、若手リーダー研修会、見学会、平和についてのパネル・ディスカッション、日本の夕べ、IFUW晩餐会等、盛り沢山の行事が計画されております。

特にJAUWが若手会員の活性化を目指して、旅費の一部援助を行う若手リーダー研修会と、今井前国際第一委員長の呼び掛けで募金が行われました平和学奨学金（三百五十万円）の贈呈、参加会員を無料でご招待する日本の夕べは、各国より大歓迎され、かつ感謝されております。平和学奨学金をどのような形で活用するかについて、IFUW理事会より提案を求められておりますので、何かよいアイディアをお持ちの方は、是非LACまでご連絡くださいませ。

IFUW晩餐会では、ラッフル（富籤）の賞品として五十万円相当の真珠のネックレスを初めとして、ペンダント・ヘッドや版画などが用意されます。二枚で千円のティケットをお買い上げいただいて、素敵な賞品を当ててくださいませ。

国連の経済社会理事会に諮問的地位を有するIFUWは、女児の人権と教育を中心課題として、今度の会議の成果を九月の第四回国連世界女性会議に繋げていこうとしております。JAUWも専門者会議や分科会に積極的に参加して、会議の成功に寄与することが期待されております。

さて、この会議を支える最も大事なものが資金でございます。会議開催を引き受けた時には予想もしなかった経済不況に遭遇し、募金委員の皆様方は企業対象募金では、大変なご苦労をなさっています。会員対象募金は、八百名を超える会員の皆様からご寄付をいただいて、三千万円の目標額まで後一息というところまで漕ぎ着けましたが、会員数二千名を擁するJAUWといたしましては、まだまだ今後も会員の皆様からのご寄付を仰がなければなりません。どうかよろしくお願い申し上げます。

二十一年前の東京・京都におけるIFUW国際会議は、今だにその素晴らしさがIFUW会員の間で語り草になっておりますが、今回も世界六十数ヶ国からやって来るIFUW会員の皆様方に、さすが日本、素晴らしい意義深い会議であったとご満足いただける国際会議にするために、何とかみんなで力を合わせようではありませんか。

今度の国際会議では、青木怜子会長をIFUW副会長候補に指名し、日本の会員の声をIFUW理事会に反映していただくことになりました。皆様からのご声援をよろしくお願い申し上げます。

楽しさと感動に溢れ、世界の友人たちと共に学び、分かち合い、私たちの声を国際社会に届けることのできる会議を夢見て頑張りましょう。

会員同士の合言葉
「国際会議の募金　もうなさいましたか？」

セミナー報告

一九九四年度ＪＡＵＷ全国セミナーは、開催日が例年の九月から十月に変わり、八日、九日の二日にわたって千葉幕張の海外職業訓練協力センター（ＯＶＴＡ）で全国から約一七〇名の参加者を得て開催された。テーマは『高等教育と女性―その社会的還元』。

東京支部は研究発表の参加は無かったがセミナーの実行委員として、茨城、神奈川支部と共に本部に協力し、多くの会員が出席した。

八日は九時半から各支部、委員会の研究発表が行われ、昼食をはさんで午後二時半過ぎに終了し、その後日本女子大教授・木村愛子氏による「働く女性をめぐる法的諸問題」、電通ＥＹＥ社長・脇田直枝氏による「キャリア・ウーマン考現学、大卒就職者に見る現状」の二題が講演された。

懇親会は三階のラウンジで立食で開かれた。東京支部担当の司会でなごやかに食事と懇談のひと時をすごした後、一九九五年の国際会議に催される日本の夕べのリハーサルが参加支部の協力で行われた。

九日は分科会が(1)高学歴女性と職業、(2)高学歴女性の社会参加、(3)高学歴女性と国際貢献、(4)これからの高等教育の四つに分かれ、それぞれに有意義な意見が交わされた。午後からはその報告と、佐藤宏子企画委員長の議長によって全体討議が行われ、ここでも熱心な討議がなされ、時間をオーバーする盛り上がりを見せて閉会となった。

特に、今回のセミナーは一九九五年八月に横浜で開かれる国際会議のテーマ「女性の未来は世界の未来―生存と進歩のための教育」に対しての準備の意味もあり、参加した会員全員から国際会議をぜひとも成功させようという熱意と情熱がひしひしと感じられた。

（関口瑞穂）

―セミナーに参加して―

一九九四年度のセミナーに際して、実行委員として参加した東京支部委員十余名の感想、意見等を、ここにまとめてみた。

≪テーマ・高等教育と女性―その社会的還元≫

「最高学府」という言葉が生きていた時代に大学を卒業した世代の多い参加者にとっては、それぞれ誰もが生涯を通じて自分に問いかけ続ける問題であり、また、大卒量産時代といわれる今日の後輩へのメッセージともなり、ＩＦＵＷ国際会議の前哨戦としてのみでなく、関心度の高いテーマであった。

≪研究発表・講演≫

毎年ながら研究発表の時間が少なく、発表者側も聴く側も不満が残る。各支部の熱心な研究には頭が下がるが、発表内容には統計的なものが多く、もっと生の声や未来への展望などが望まれる。

講演では、木村愛子氏の『働く女性をめぐる法的諸問題』は、女性の社会的地位の確立には、個人の努力のみではなく、法決定の場に女性の参入がもっと必要であると痛感させられた。また、女性のみの会社、電通ＥＹＥ社長脇田直枝氏の『キャリア・ウーマン考現学、大卒就職者に見る現状』は、女性の能力と立場を生かしてしなやかに仕事のできる、女性のみの会社のあり方に驚かされた。

≪分科会≫

せっかくセミナーに参加しても一方的に聞く側に終始するのではなく、分科会でひとりひとりが意見を交換することで、より一層テーマを自分のものとして捉えられて良かったが、偏った人の体験談の披露の場になる恐れもあり、討論の進め方に個人の良識を求める声もあった。

≪全体討議・決議文≫

全体討議で盛んな討議がなされ、後日決議文が作成され、関係機関に提出されるが、我々の声が充分に評価され活用されることが望まれる。

≪その他≫

会場は二回目で慣れているということもあり申し分ないが、マイク等の故障は残念だった。懇親会は東京支部が進行係を担当し、今回は国際会議の「日本の夕べ」のリハーサルが行われたが、本番は一年先のことはいえ、少々お粗末。

一参加者としては、セミナーに参加するなら積極的に取り組み、参加することによって何かが得られるよう個人的な努力の必要性を痛感した。

講演二題

「統一なったドイツの現状」

講師　小平シュムプ唄氏

唄さんはドイツマンハイム出身、キール大学社会学部マスター修了、マスター論文には「貝原益軒〝女大学〟女性の役割のアナリシス」を書き、その後ハイデルベルグ大学、モンペリエ大学、ダブリンのトリニティカレッジを経て現在NHK国際放送ラジオジャパンのキャスター及び、東京工業大学の専任外国人講師として大活躍の毎日。夫君は東大教授を経て今春東京国立天文台長にご就任。お二人の間には三人のお嬢様、NHKスポーツキャスターの小平桂子アネットさんは次女とか。

さて、歴史をふりかえるとドイツ帝国は第一次大戦後ワイマール共和国となり、次にヒトラーのナチス政権が続き、第二次大戦後は、首都をベルリンに置くドイツ民主共和国(東独)と首都をボンに置くドイツ連邦共和国(西独)に壁を隔てて二分される長い時代が続いていた。

ところが、一九八九年十月三日に東西の壁の崩壊という事実が唐突に起こったのだ。遠い国に住む我々の驚きも勿論だが、故国を離れ日本に住むドイツ人唄さんにとってその驚きは想像を絶するものだったとのこと。壁崩壊直後男性たちは「自分自身の戦争がやっと今終わった」と口にし、その日はドイツの男性が一番多く泣いた日であったと唄さんは言う。喜びの涙か、万感胸にせまってのものか。第二次大戦後何十年もの間、西と東の人々がいつまでもさめない夢をみていて、やっとその日に夢からさめたのだと。

唄さんは壁崩壊直後ベルリンの大学に招かれ三十年ぶりに街を歩いてその荒廃ぶりに言葉を失ってしまったとか。大学生の頃歩いて覚えていた街並は文化の香り濃く人々も美しく芸術味溢れていたのだが、戦後の復興のないまま荒廃した状態の中で人々が生活していたのを見て、改めてこれからの問題の大きさに直面する思いだったと言っている。

この三月再びドイツを訪れ、歴史のあるトリスタン、ワイマール等という街々の修復が始まっているという話を耳にしすごく嬉しかったとか。今、東独を旅すると教会修復の為のレンガ寄付が流行とか。我々も東独旅行の途中に、とある街の教会に一枚のレンガを残すことが出来たら素敵なことではないかと思えてきた。

(藤谷文子)

「社会人として四十年の体験」

講師　滝田あゆち氏

一九九四年のセミナーのテーマ「高等教育と女性―その社会的還元」を前に、幸いにして滝田あゆち氏による講演を聞く機会を得た。

「高等教育のメリットは?」「その社会的還元とは?」に始まり男性中心の社会の中で氏は現在に至るまでの体験として自分史を中心に親しみやすくお話しになった。

氏は、築地小劇場で女優としての経歴をお持ちのお母様の職業に対する考え方に強く影響され、職業に強い情熱を持っておられた。ご自身のことばを借りれば職業についた理由として「自分のやりたいことをする自由な意志とそのための経済的自立の必要性」「自分自身の可能性をひとつずつでも自己実現し、育成したいこと」そして「人のために役に立ちたいこと」以上三点であった。しかし、当時の社会通念として女性の就職に対しては難しい状況にあった。まず一般企業への就職には将来への見込みがないと家族全員の反対を受けた上、女性を受け入れる会社は僅か数社のみという時代でもあった。

昭和三十年に東大法学部をご卒業後、日本航空に入社、総務部を経て広報室へ。新聞社からの電話に出れば「男をだせ」と。適切な対応を心掛け、努力を重ねることによって新聞記者に名を知られ、その後、米国のPR企業に派遣されてPR手法の長期研修を受けられた。昭和四十年に広報室課長として日航初の女性管理職につかれ、女性であることが有利に働くようになったが、しかし、何か失敗があれば女性は駄目だといわれる、後輩の為に責任を感じられた由。広報部担当役員付理事を経て、平成二年に国際理解の上に立ち、社会貢献を基軸に設立された日航財団に移られ、現在は常務理事として国際的に幅広くご活躍中である。

同財団として代表的なものに、俳句を中心とした日本紹介「世界の子供ハイクコンテスト」、東アジア・オセアニア地域の優秀な大学生及び若者を中心とする「アジアフォーラム」等があり、地球的規模で物事を考え行動できる人材の育成と交流にお忙しい毎日である。

「人間として誰かのお役に立てるなら」と話される氏の表情には「星の王子様」を愛読されている夢見る少女の雰囲気さえ感じられた。

(大谷幸子)

見学・講座

「寛永寺拝観とお話」

講師　寛永寺執事　浦井正明氏

十月二十六日、秋も深まりゆく上野東叡山寛永寺に、五十余名の会員が集合しました。寛永寺執事浦井正明氏より、午後一時から四時まで、寛永寺にまつわるさまざまな歴史上のお話を伺いました。

寛永寺は総坪数三十六万坪という広大な敷地を有し、家康公・秀忠公・家光公と徳川三代にわたり深く帰依された学徳高い天海僧正が、元和八年（一六二二年）に創建されました。上野の桜・不忍池の蓮とともに上野の山のシンボルとなっております。

執事の浦井氏のご案内により、本来一般人は立入禁止という「歴代将軍の霊廟」を拝観させていただきました。この寛永寺には、四代家綱より、五代綱吉、八代吉宗など十六代までの将軍のお墓があります。特に綱吉の宝塔は、あの関東大震災にも耐え、当時の幕府が建立したままで残っている唯一の墓ということで、建築上の意義も深いそうです。

宝塔の前で、氏の身振り手振り、時にはユーモアのあるお話しぶりに、一時間があっという間に過ぎてしまいました。周囲の巨大な木立の間を立ち歩く私たちにも、徳川歴代将軍の息使いが聞こえてきそうなほどの静寂でした。

次に大慈院内「葵の間」にご案内いただきました。ここは十五代慶喜が二ヶ月間謹慎されたお部屋です。再び氏より、明治維新前後の数々のエピソードを拝聴しました。

素晴らしい歴史的知識と深い洞察力、そして滑らかな口調、またたく間に、終わりの時刻となりました。

上野の山文化ゾーン連絡協議会の役員として、文化財の保護に力を入れておられる浦井氏に、心からの感謝をしながら、定刻通り四時に散会しました。文化の香りにちょっぴりひたった秋の日の午後でした。

（待場田鶴子）

慶喜公謹慎之間（葵之間）

「雅楽講座」

講師　宮内庁式部　上　明彦氏

赤や黒の不思議な面、唐織錦の裲襠装束、極彩色の鳥甲、躍動的なリズム。雅楽に出会ったとき、強烈な古代アジアへの憧れとともに、私たちの血に呼応するある懐かしさを感じるのは何故だろう。

ＩＦＵＷ国際会議開会式の雅楽公演に先だって、十一月十九日に雅楽講座が開催された。

おりしも、大相撲九州場所の真っ最中、「千秋楽」は雅楽の曲名とか。「二の句が継げない」「打ち合せ」など日常用語にもずいぶん雅楽の影響があるという。宮廷貴族や権門寺社などの占有物で、我々衆生には縁のないものと思っていたのが急に身近になる。

歴史上は、日本書紀によれば五世紀半ば允恭天皇の殯宮に「種々の楽人」が新羅から渡来したのが最初らしい。左方と呼ばれる中国、インド、ベトナム系、右方と呼ばれる朝鮮系、それらアジア大陸から渡来したものと日本古来のものとがそれぞれに平安中期に完成し、以来幾多の盛衰を経たもののほとんど元の姿で今に伝わっているという。雅楽が「生きた正倉院」と呼ばれるのもうなづける。それにしても、遠い昔から日本はけっして島国などではなく、アジア大陸に太く結ばれていたことを再認識させられた。

源氏物語の「紅葉賀」で光源氏と頭中将が舞い、天まで感涙を催したという「青海波」を、講師自ら吹いてくださり、会場はしばしの恍惚境。源氏物語中随一の笛の名手、頭中将を彷彿とさせる上明彦氏であった。

ついで、大槻装束店のご協力で右方の舞楽「散手」の装束を学生モデルに着付けながらの説明を聞く。そういえば、裲襠と同じような装束が京劇にも多い。相撲の化粧まわしも似ている。源流を辿れば同じ泉にたどり着くかも知れないなどと、勝手なロマンにひたる。至福のひととき。

既にアジア大陸の地では元の姿を失った文化が、日本の地では今も生き続けている、この歴史の不思議は何だろう。世界に類を見ない皇統を基にした歴史の在りようが、ひとつの文化の伝承に係わっていることは確かであろう。

（坂上栄美子）

「NHK見学」

今年度の行事もいよいよ大詰め。二月十三日NHKを見学した。

当初予定していたハイビジョンによる「ばらの騎士」は、ほんの一場面のみで、「これからの活動と勉強の糧にしていただきたい。」というNHK側のご配慮で「阪神大震災報道特集」を見せていただいた。惨状をより生々しく伝える映像に息を呑む。この鮮明な画像は、様々な分野で分析研究され、世界中の人々の役に立つ事が期待されているとのこと。

ハイビジョンは、迫力のある音声や見やすさという点で、特に高齢者に喜ばれているという。

その後、スタジオを見学。あのドラマ、あの名場面がここで収録されたかと思うと心が躍った。通常の見学者コースとは違って、番組製作の舞台裏まで見せていただき、とてもうれしかった。

一九九四年度国外奨学生ラメッシュさん報告会

二月二十日、住友クラブに於て、京都大学で研究中のラメッシュさんの報告会が催された。短期間の滞在ではあったが、最大限の研究成果をあげられた事を喜びたい。

国内奨学金贈呈式

一九九四年度大学婦人協会国内奨学金贈呈式が、ストラーダ新宿で一月十四日に行われた。

東京支部長の開会の辞に続き、奨学生の選考経過報告があり、会長より祝辞とともに、恵まれた環境で教育を受けられることへの幸せを感謝し現在の研究を将来社会に還元してほしいという旨の挨拶があり第一部を終了。第二部のお茶会に入り奨学生各人からのスピーチを聴く。地道に研究に取り組みながら、その研究を常に今の世界と照らし合わせ、その進歩発展に役立つべく一生懸命勉強している皆さんの真摯な姿とそのしっかりした考え方に感心しまた感動した。このようなすばらしい若い女性の能力が必ずや将来社会で活用され還元されることを願わずにはいられない。

難しい研究テーマと取り組んでいる方ばかりなのにその雰囲気は本当に女性らしく、この奨学金は将来への精神的な支えと励みとしたいと異口同音に語られ、私共が少しでも役立っているという幸せとこの奨学金の意義を改めて感じた。

（西尾順子）

激震の神戸支部へお見舞

本部主催の「新春のつどい」は参加者一三三名、一月二十一日東京プリンスホテルにおいて行われた。

桑島すみれ氏の幻想的なハープの調べに、しばし時の経つのを忘れる。房野LAC準備委員長の司会の下、乾杯、会長挨拶、IFUW日本大会の準備進行状況の説明を聞きながら会食し、歓談をする。一方誰しも心にかかるのは未曾有の災害に遭われ、苦しんでおられる皆様のこと。会長から前田神戸支部長と連絡がとれ、支部の皆様ご無事！と伺いほっとする。神戸支部へのお見舞金にはゲストの桑島すみれ氏もご協力くださり、二十五万円余りのお金が集まった。これに当日欠席の理事の方々の拠金、本部よりのお金を加え五十万円とし銀行口座に振込む由。当日出席者の大部分は東京支部会員ながら、更に支部としても当日のバザーで皆様にご協力いただいた中から五万円を拠出。他の支部の拠金も同様に口座に振込むほか、出席者へのお土産として用意した明治乳業の食品は神戸支部にお送りし、大変感謝されたとのことである。

行事報告

7月1日　「ともしび」16号発行
1日　講演「統一なったドイツの現状―パズル？」
講師―小平シュムプ唄氏
9月28日　講演「社会人として四十年の体験」
講師―滝田あゆち氏
10月8日　JAUWセミナー
テーマ「高等教育と女性―その社会的還元」
（本部主催）
10月26日　見学「寛永寺拝観とお話」
講師―寛永寺執事
浦井正明氏
11月11日　漫歩会　帝釈天
11月19日　講座「雅楽講座」
講師―宮内庁楽部
上　明彦氏
1月14日　国内奨学金贈呈式
1月21日　新春のつどい（本部主催）
2月13日　見学「NHK見学」
（ハイビジョン）
2月20日　ラメッシュさん（国外奨学生）を囲む会
3月1日　「ともしび」17号発行

東京支部新入会員

(1994年12月現在)

氏名	出身校	住所	氏名	出身校	住所
小西千恵子	実		菊地晴子	日女	
鈴木益恵	学		椎名秋子	日女	
藤田祐子	新潟		江原孔江	津	
水口かおる	東女医		小柴登志江	早	
松本佳子	茶		高野映子	大女	
ゴードン・レノックス・オデル	グルノーブル		辻本真子	早	
小橋アンス	アムステルダム		徳永洋子	聖	
長島憲子	聖		横橋貴子	実	
西尾順子	東女		大金慶子	埼玉	
待場田鶴子	大女		謝敷仁美	聖	
渡辺真利代	都		滝沢万由美	埼玉・法院	
河村晶子	東女		平岡比良子	神女	
上原すゞ子	千葉・院		中野裕美子	日女	
高木美代子	日女		長嶺文子	聖	
三隅能子	九州		上山民栄	東北	
吉村富子	日女		杉田雅子	津	
尾形佐知子	日女		千葉恵子	津・ウェルズレー	
岩村道子	東京		山田由美	成城	
左巻恵美子	千葉・筑波院		福田悦子	成城	
松本みどり	千葉・慶				

＝謹弔＝

副島芳子　聖　94年2月6日
笹川　滋　津　94年2月22日
瀬野信子　茶　94年3月22日
井上繁子　津　94年6月6日
清宮和子　津　94年8月2日

◎報告

昨年末に、「ボランティアグループ留学生相談室」と「さわやか福祉推進センター」を訪問し、それぞれに三万円と二万円を寄付した。

「ボランティアグループ留学生相談室」では、担当者に聞いたところ最近は相談内容が以前に比べ多岐にわたってきているという。また、これからの時期、一番困るのは、「どこの大学にも入学できなかったが、どうしょう」というもので、その折には、慰めたり励ましたりにおおわらわだそうだ。

「さわやか福祉推進センター」では、専従職員、アルバイト、他企業からの出向者、ボランティア等の力で軌道に乗ってきて、近々財団法人としての許可が得られる由、その喜びが担当者から伝わってきた。

なお、例年どおり、使用済み切手を「中野盲人自立センター」に送った。

◎寄贈図書紹介

○『もうひとつの徳川物語』
(将軍家霊廟の謎)
浦井正明著(寛永寺執事)
誠文堂新光社
寄贈者　浦井正明氏

○『リフォームで作るおしゃれ服』
古川敏子著
創元社
寄贈者　古川敏子氏

編集後記

例年だと、二月一日が発行日だが今回は、三月一日となり、部員一同クリスマスとお正月をのんびりと過し、英気を養った後、一月末から始動した。

ほとんどの原稿が、執筆者の協力で、去年のうちに係りの手元に届いていたので、仕事は順調にはかどった。

ところが、その最中、阪神大震災が発生。緊張が走る。神戸支部会員全員の無事を確信していたところへ、母里(もり)美枝様の訃報が入る。一同茫然、謹んでご冥福を祈る。

ともしび 十七号　発行日　一九九五年三月一日　発行　大学婦人協会東京支部　ともしび編集係
〒160 新宿区新宿七―十七―十八戸山マンション二四一号　Tel〇三―三二〇二―〇五七二　印刷　タナカ印刷㈱